「あとづけの理由」と「暗黙知信念」の共犯関係の事例

車田 研一（Kenichi Kurumada）

独立行政法人国立高等専門学校機構 福島工業高等専門学校

実験的科学研究の過程では，一般的には実験行為は或る仮説に対する証拠の生産行為と看做される。その実験の結果が仮説に対し何らかの意味で支持的に作用している印象がある場合，その仮説の主張内容はすくなくとも部分的には正当化される可能性を得る。科学研究における仮説の生産の契機は，多くの場合，それがたとえば「分子模型」のような抽象化されたモデルの想像上での操作などの媒介的な表象をはさむことがあるにしても，始原的には視・聴・触覚等に代表される身体的一次情報である。科学研究者はこれをたよりに「当該状況再現」と「計測」を二主柱とする実験系プランニングを行う。

＜実験＞を記号的なトークンとして抽象的に捉える机上思考スタイルに慣れてしまうと，上記の実験系のプランニング手続は，研究者（knower）の心的＜タブラ・ラサ＞状態に上記の身体的一次情報が「状況素描」としてスケッチされた段階で，ごく自然発生的・準確定的（≒ 一意的）に，なおかつ高い＜プロセス信頼性＞を伴ったまま，スムースに進行するかのように考えられがちだ。（たとえば，スープの食感をつかもうと思うのであれば，その「粘度」を，しかるべき計測機器（粘度計）を用いて測ればよいのだ，という妥当な行動プランがほぼ自動的に生じることが一見科学的にトリヴィアルであるかのように。）しかし，実際の科学研究の＜工程＞では，プランニングの際に択ばれうる実験や計測の手法の種類が極めて限られていることに因る影響は絶大である。換言すれば，knower の実験工程考案過程は，プロセス信頼性の至適化といった鮮やかな哲学概念的カテゴリー化を事実上許容してはいない。ほとんどの場合，knower が実際に採れる具体的な手法は，社会構成主義的な意味合いにおいて，実質的には唯一といえるほどに限られる。さらに，この傾向は，その時点でのその領域でのパラダイムが安定に機能しているほど顕著である。その結果，ある特定の対象に対する knower らのキャラクタリゼーション作業（特質の同定行為）の結果は，必然的に，互いにほぼ同等となる。この同等性は，自然科学の根幹的性格としての，＜科学的客観性／共通言語性＞に対応する。敢えて「現場的」な表現をすれば，knower としての科学研究者は，この同等性レジームからの乖離になかば憧れ，反面，なかばそれを懼れているといえよう。

通常の科学研究の工程では，仮説の生産過程は，いわばメタ・シンキング（= 曖昧な要素を包含した，いわゆる＜着想＞行為）の範疇のみで行われ，公的に公表される研究記録中ではまず言及されることはない。そしてさらに，公共的な研究結果報告の段階ではこれは隠蔽される傾向がある。（この隠蔽の潜在的動機は別途熟考されるべき問題だ。）

実際，実験行為や結果の吟味等がすべて完了したのちに為される研究報告においては，明示された研究上の仮説自体は，実験結果やその吟味行為の影響をまぬがれえていることこそ，むしろ少ない。いわば，研究行為の動機が，研究発表の段階で既に実在している＜結果的知見＞をベースにした「あとづけの理由」により一種の信念として形成され

るという舞台裏演出のもとに，先ず語られる。続いてそのメイクアップされた仮説的信念を検証するという＜受容可能な科学的ナラティブ＞へとくみこまれるように実験結果が実物証拠として収集・提示され，最終的に一作品としての＜正統的な科学研究＞が有価的被発表物として成立するという，一連の＜科学研究生産フロー＞が作動するのだ。

上記の，一般には科学研究者の立場にある knower に明確には意識されづらい，「あとづけの理由」としての実験結果の逆密輸型のフィードバック回路の暗々裏の作動の想起は，科学研究者自身にとっては不快な舞台裏話だ。しかし，「理論や方法の適用範囲を漸次拡張的に探索する」という研究行為の目的上は，実験科学の実務的な結果整理法として，上記の＜結果の逆密輸による仮説のトリミング＞は充分な現実的有用性を担保している。現に，科学実験の予想外な結果の新規性の真偽は，被想定仮説とそれに対応する結果のあいだの往還的検証に準じた既存説明理論の段階的拡張による説明可能性を検討し尽くしたのちに，漸くその存否を検討されるべきものだからである。

上記の議論では，建前上は科学研究の出発点として扱われる仮説的信念が，実は knower が最終的に獲得する結論的描像の逆密輸版になりがちなことを指摘したうえで，このいわば確証バイアス型の回路の作動は，科学研究の健全性に対し積極的な悪影響はないと述べた。ただしこれは，knower 自身が，自身の実験結果からの逆密輸型回路を経て形成された仮説的信念の利用意義に，素朴に，もしくは確信犯的に，満足している場合に限られる。knower が，自身が得た実験結果とそれに対応する仮説の間の関係性を抽象し明示化することができない場合や，あるいは，そもそも仮説的信念を逆密輸的にさえ形成できない場合には，knower は他の仮説生産手段を採らざるをえなくなる。

今回ここでは＜暗黙知信念＞が knower や peer の集団において支配的な仮説的信念として作動する蓋然性が高い（現実に筆者が経験した）実験研究の事例を紹介する。そこで示されたのは，上述の「実験結果逆密輸」型の仮説的信念を建前上の出発点とする標準的な科学研究の形式においては，仮説的信念の構築が，仮説と結果を連繋するナラティブ・フローの強い統禦下におかれるため，その内容が knower や peer が本来懐きうる原型的疑問を内包した naïve かつ open なものから，ナラティブ負荷性の大きな，確証バイアス型の回路の支配下にある enclosed なものになりがちなことである。この＜転流工（diversion channel）＞作用の発現には暗黙知信念が寄与しており，なおかつ，これが暗黙知的な集団作用であるという理由により，極めて社会構成主義的な意味おいて，疑義に附される可能性が低い。本発表では，「あとづけの理由」に調和する仮説的信念の形成契機として＜暗黙知信念＞が「作品としての科学研究」の形成過程において共犯的に作動し，仮説から結果へのナラティブ負荷型の過程の整流が発生するという，knower にとっての認識上のリスク事象があることを，事例紹介をもとに議論する。

参考文献

阿部裕彦「「あとづけの理由」からのプロセス信頼性主義批判」日本科学哲学会第 54 回(2021 年度)大会 A-4

苗村弘太郎「歴史学における証拠の物語負荷性に関する議論」科学哲学科学史研究 11 号（2017 年）1-16 頁

麻生尚志「プロセス信頼性主義を科学的反実在論と整合的に再定式化する」科学哲学 46 巻 1 号（2013 年）35-51 頁